



営農情報

「あまおう」10月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和2年9月28日現在の登録資料に基づいて作成しています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

花芽分化のまとめ

早期作型は、例年以上に揃いが良く順調に花芽分化が進みました。普通作型は、多少バラつきがあったものの、9月17日以降の最低気温が20℃を下回ったことで、花芽分化の中心は例年並みの9月23日～25日頃となりました。豪雨による苗の流出や炭そ病多発による苗不足が心配されましたが、生産者間の協力により大きな遅れなく定植されました。

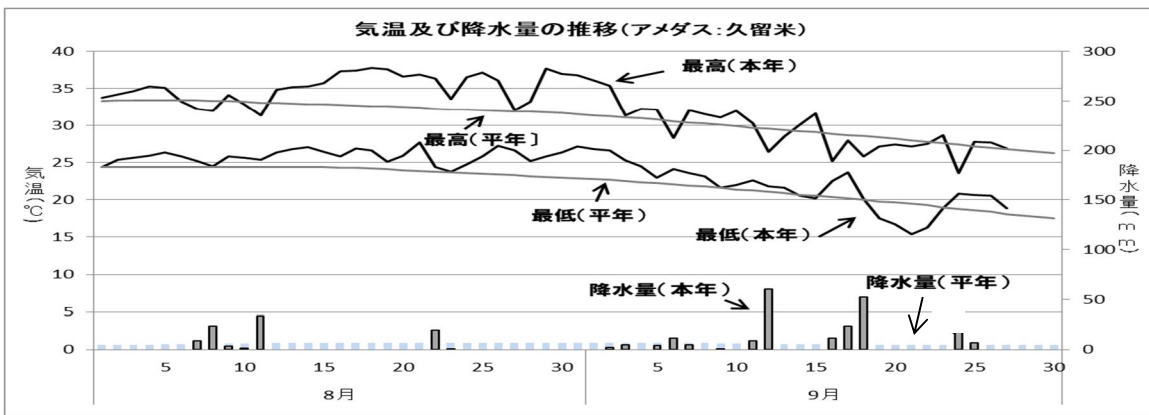


図1 気温及び降水量の推移（アメダス久留米より）

気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

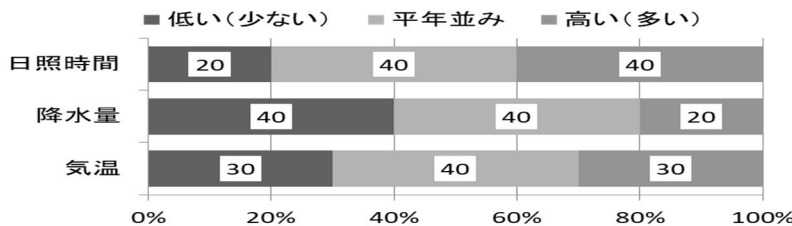


図2 1か月予報（九州北部地方 予報期間：9月26日～10月25日 発表日9月24日）

(2) 今後の見通し

10月は平年に比べると降水量が少なく、日照時間は長い予報となっております。育苗期にハダニ類の発生が多かったほ場では、今後の多発に注意しましょう。

今後の管理のポイント

[懸案事項]

- ①早期作型における2番果房の花芽分化遅延
- ②ハダニ類、ヨトウ類の発生拡大

[対策]

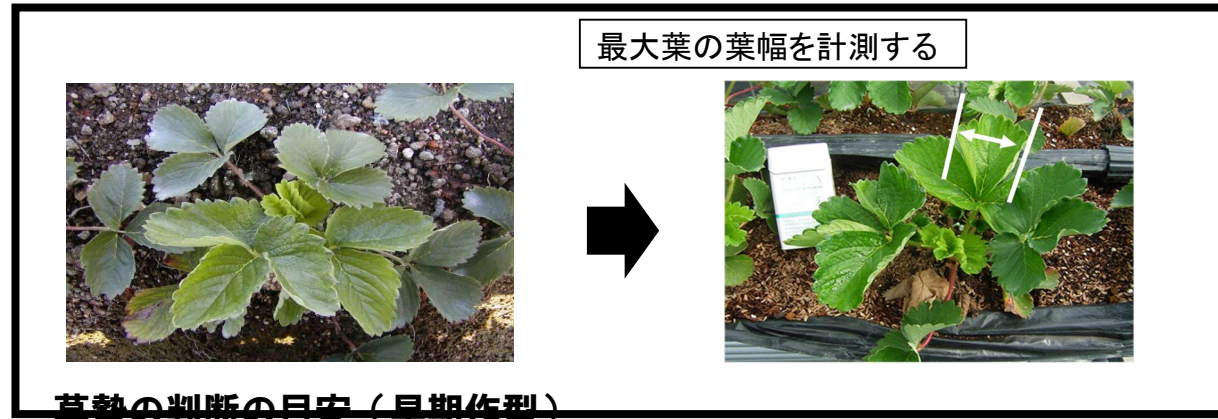
- ①寒冷紗を被覆して、花芽分化を誘導する。2番果房の花芽分化を確認して被覆を除去する。
(被覆期間の目安：9月25日～10月20日)
- ②定期的に薬剤による防除を行う。特に葉かぎ後の防除を重点的に行う。(葉かぎ後はハダニ類のいる葉裏に薬液がかかりやすいため。)

【表1 10月10日頃の草勢の目安】

寒冷紗被覆した場合

作型	展開した最大葉の葉幅	葉長
早期作型 (9月15日頃定植)	8.5cm	9cm

※寒冷紗被覆しない場合、葉幅は7.5cm。これ以上になると1番果房と2番果房の内葉数が多くなる可能性がある。また、これより極端に劣る場合は、無理な抑えはしない。葉幅の長さにより草勢を判断し管理のしかたを変える。



10月上旬の最大葉幅長（定植後出葉した中で最も大きい葉の横の長さ）を測定する。

1 かん水管理

① 活着までの間

極端なかん水は避けて少量多回数を心がけ、順調に活着させる。

活着後はかん水を控えながら、2番果房分化後は生育に応じてかん水を調節し、根張りを良くする。

10月上旬頃のかん水の目安は葉が軽く内側にまく程度！

② マルチ後から果実肥大期

要水量が増えるのでかん水をやや多くする。特にマルチ直後はチップバーンを予防するため十分なかん水を行う。収穫期には着色・食味を考慮して控えめのかん水とする。展葉が遅い場合は、発根促進剤等を利用して発根を促す。

2 株整理(下葉除去・どろ芽除去)

- 活着した定植20日目頃から、傷んだ葉・枯葉を取り除く程度の葉かぎを実施する。
- マルチ前に葉数が4～5枚になるよう摘葉する。
- 葉かぎをしすぎると心葉の展開が急激に進み、2番果房の分化に悪影響となるので極端な葉かぎは避ける。
- 摘葉後、ハダニ類やうどんこ病などの病虫害防除を実施する。
- 不要な腋芽やクラウンから発生するどろ芽・ランナーは早めに除去する。

3 マルチ

早期作型では1番果房の出蕾が始まったら、花蕾を傷めないようにマルチ被覆を済ませる。普通作型では10月下旬が目安になる。

- マルチによって地温や水分条件が変化するため、生育が旺盛な時期には、急激な乾燥によるチップバーン等に注意する。また、マルチ被覆が早すぎて生育旺盛となった場合には、2番果房の分化が遅れる傾向がある。
- 根張りを促すため、最初はマルチのすそを畝の肩まで上げておく。地温が13℃以下になる10月末～

1 1月上旬頃にマルチを閉めこみ地温確保を図る。

- 適期から遅れて定植したほ場や、生育が悪いほ場では、生育促進のためにマルチは早目に行う。

4. 2番果房分化対策

(裏面につづく)

(1) 草勢管理 (寒冷紗被覆とかん水制限)

早期作型は2番果房分化対策を実施し、花芽の状況を検鏡で確認する。

いつ分化するのか(したのか)、内葉数は何枚なのかで、その後の管理が変わってくる。

早期作型は、寒冷紗被覆とかん水制限により生育が旺盛になり過ぎないように管理し、花芽分化確認後、生育促進を図る。ただし、普通作型は2番果房分化対策の必要はない。

(2) 追肥 (2番果房分化後の施用が基本)

2番花房の分化時期は、早期作型では10月中旬以降、普通作型では10月下旬以降である。この時期の生育状況によっては、2番果房の分化が遅れることがある。

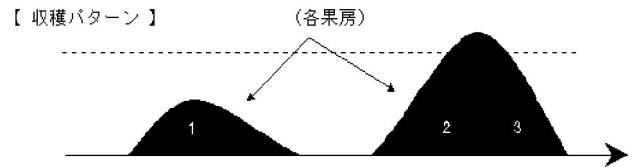
- 活着不良等で生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。
- マルチ前追肥は、2番花房の花芽分化を確認した後施用する。(10月中旬頃)
- 草勢が旺盛(10月上旬で最大葉幅8.5cm以上)で、マルチ被覆までに2番果房の分化が確認できない場合、畝上の追肥を控え2番果房の分化後に溝肥を施用する。
- 普通作型の場合、追肥はマルチ張り(10月下旬頃)の3~4日前に行う。

【表2 追肥量の目安】

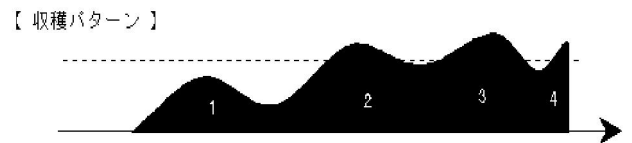
肥料名	成分率 (%)	投入量 (kg/10a)	窒素量 (kg/10a)
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg
新生いちご配合	6-6-4	80kg	4.8kg

～早期作型における「定植後の草勢」と「収穫量」の関係～

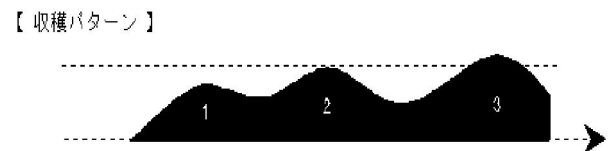
- ① 草勢の強い生育をした場合
(葉幅が8.5cm以上、葉の展開が早い)
2番果房の分化時期が遅れ、内葉数も多くなり、収穫量の時期別変動が大きくなる。



- ② 中程度の草勢で生育した場合
(葉幅が8.5cm程度、葉の展開も中程度)
2番果房の分化時期が早めで、内葉数も多くなり(4枚~5枚程度)果房の発達に十分な草勢も厳寒期を通して確保でき、収穫量が安定する。



- ③ 草勢の弱い生育をした場合
(葉幅が8.5cm以下、葉の展開が遅い)
株の栄養状態が低いため、2番果房の分化が早く、内葉数も少ないので、果房が連続し収穫量の変動は小さくなるが、果房の発達が弱く、株疲れしやすいので収穫量が劣る。



5 ビニル被覆

- ビニル被覆は平均気温が16℃程度となる頃が目安。ビニル被覆は2番果房の花芽分化後に行うのが基本であるが、既に1番果房が開花している場合で雨天が予測される場合は、速やかに被覆する。(花に

強い雨があたり、奇形果の発生が懸念されるため)

- ビニル被覆後は、サイド・妻面を開放し、出来るだけ気温が上がらないようにする。
- サイドや妻面は、最低温度が10℃を下回るようになったら、閉め込みを行う。
※ただし閉めこみ後、夜温10℃を上回る日は換気を行い、果実の早熟や急激な株の立ち上がりを防止する。
- 草勢が弱い場合、ビニル被覆を早め、やや高めの温度管理で生育促進を図る。

【表3 果房の生育状況別温度管理の目安】

頂果の状況	昼間	夜間	備考
～ 着果期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期～ 白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期～ 収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

6 ジベレリン処理

- 1番果房出蕾直後～開花直前に、10ppmで5cc/株の処理を行う。
- 湿度が低いと効果が低いので、かん水後に処理する。
- 開花後にジベレリン処理した果実は、奇形果になる可能性があるため開花前に処理する。

ジベレリン使用した際には、忘れずに防除履歴に記帳してください。

7 ミツバチの導入と管理

- 農薬によってはミツバチへの影響があるため、日数には余裕を持って防除する。
- 巣箱の搬入は1番果房の開花7日前までに行い、環境に適応させておく。
- 一般にミツバチは20～23℃前後で最も活発に訪花活動して、14℃以下の低温や25℃以上の高温条件下ではほとんど訪花しない。寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すため巣箱をハウス内に入れておく。
- 基本的に巣箱はハウスの外に設置し、ハウスにミツバチの出入り口を設けておく。

全国的に交配用のミツバチが不足ぎみとなっています。ハチの管理等は養蜂農家と十分に相談し、健全なミツバチで確実な交配を心がけて下さい。

8 病害虫

ハダニ類の発生が続いており、ヨトウムシ、アザミウマ類も増える時期なので、早めの防除を心がける。

- 葉かぎ後には効果の高い薬剤でハダニ類の防除を行う。
- 定植後の炭そ病の発生も懸念されるので、確認、除去、補植、防除を行う。また、うどんこ病の予防防除は確実に行う。

9 親株の管理

- 本田の栽培面積に応じて、十分な親株本数を定植する(本田栽培面積10aあたり600～800株)。
- 炭そ病が発生していない健全な苗を使用する。
- 年内に生育を旺盛にした株が、春先のランナー発生が多くなるので、11月までに定植を終わらせておく。
- 親株の数が不足する場合や、親株用の苗に炭そ病の発生が多い場合は、ハウスビニル被覆後の本田の株から発生した秋冬ランナーを利用する。ハウスビニル被覆前に発生したランナーは降雨により炭そ病に感染している可能性が高いため、必ずハウスビニル被覆後に発生したランナーから採苗する。
- 定植前に親株を冷蔵処理(5℃以下の低温に20日間程度)を行うと春先のランナー発生が良くなる。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！

【特集：不耕起（畝連続利用）栽培について】

不耕起栽培は、全面耕起に比べてほ場の乾きが良く、トラクタも使用しないため、天候の影響を受けにくい栽培方法です。天候不良による本ぼ準備の遅れにお困りの方は、次年度に向けてご検討ください。

1. 不耕起栽培とは

栽培開始前の畝立て・耕起をせず、前作の畝をそのまま利用する栽培方法

2. 不耕起栽培のメリット

- ・慣行栽培より基肥量が削減できるため、経費節約になる
- ・排水性が良くなる
- ・畝を壊さないため、天候に関わらず、本ぼ準備ができる
- ・全面耕起の場合と収量はほぼ変わらない（図3）

3. 不耕起栽培の手順

1. 果実シート、玉だし棒、ひも等を片付ける
2. 株を刈り取る
3. マルチ・かん水チューブを片付ける
4. 有機物を施用する（畝上のみ）
5. 中耕する（1畝を往復で耕耘）
6. 土壌消毒を実施
7. 土壌消毒終了後、慣行の1/3～1/2程度の基肥を施用し、10cm程度小型管理機で耕耘する
8. 管理機で土を上げ、畝上をならす

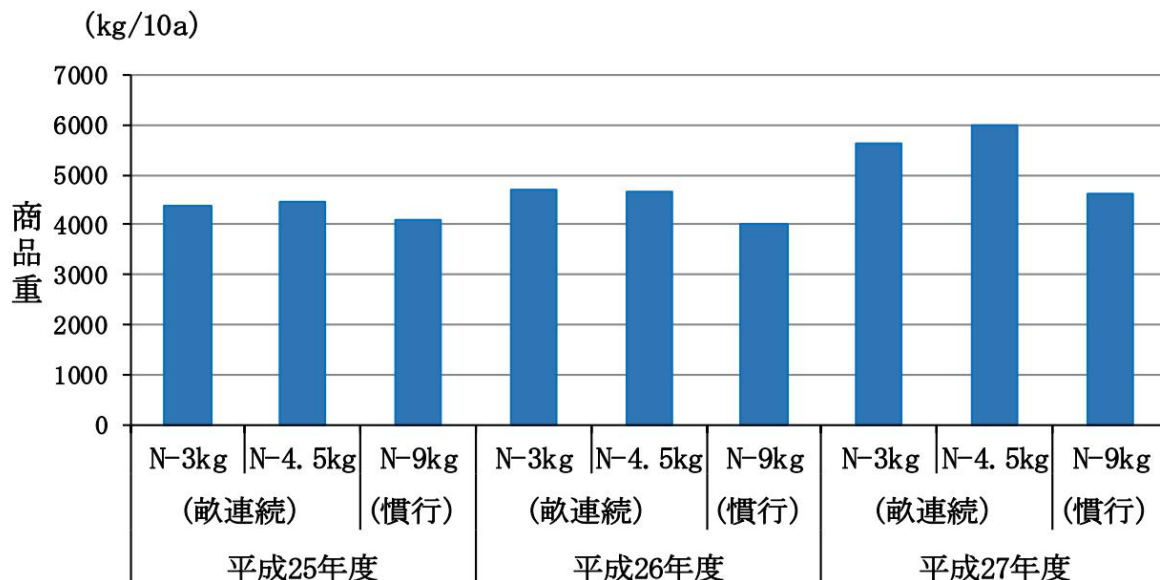
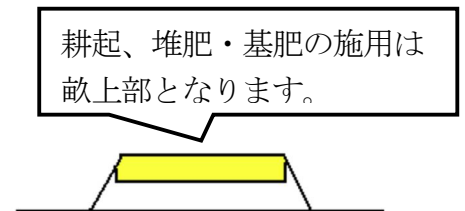


図3. 不耕起（畝連続利用）栽培と全面耕起栽培の収量（筑後分場調べ）

※詳細はJA、もしくは、普及指導センターまでお問い合わせください。